

昭和66年2月1日 第3種郵便物認可  
平成22年5月1日発行（毎月一回一日発行）  
俳句雑誌 沖 第41巻第5号



沖

俳句雑誌[おき]

5月号

沖 発行所

# 遅筆堂

能村 研三

哀悼・井上ひさしさん

井上ひさしさんが四月九日に亡くなった。

むずかしいことをやさしく  
やさしいことをふかく  
ふかいことをゆかいに  
ゆかいなことをまじめに  
書くこと

井上ひさし先生逝く 四句

花冷や逝くのは早き遅筆堂

深刻をコミカルに換へ霞濃し

朧夜に磨き尽しの言葉なり

刃のごとき緋月にして春に死す

という色紙を「沖」の三十五周年記念号に掲載させていただいた。「沖」では、十五周年の記念号でも渕上千津さんがこまつ座の稽古場を訪ねて特別企画「井上ひさしさんへのインタビュー」が掲載されている。このインタビュ、当時の編集部がつけた副題は「日本語の動詞は弱い」。その一節を紹介すると、

動詞が一番最後にきて、風呂敷に物を結んで結論を出すわけですが。そうすると沢山荷物を入れて結ぶとき動詞一個では足りなくなると言うのは、どうも日本語の特質みたいですね。

この他にも、小林一茶や芭蕉のことなど俳句に関する話もお聞きすることかできた。

井上ひさしさんの芝居を見ていて

奥の細道むすびの地・大垣 六句

花過ぎて句碑巡礼の水奔り

伊吹東風柘木積みあぐ燻し窯

春闌けて水底なびきの草ひかる

披露目すぐ軸ゆまの猩々酔ふてをり

酒壺割るからくりをかし披露目山車

行く春や黒を纏へる川燈台

常に思うのは、かなり重たいテーマに取り組んでも、現実のシガラミやら困難やら、どうにもならないことなどを、最後は「ゆかいに」笑いにしてしまうのが真骨頂だった。そして井上さんは完全主義者で妥協することなく、原稿執筆に時間をかけ、自ら「渥筆堂」と名乗っていた。

井上さんは、四月から私が副理事長を務める市川市文化振興財団の理事長も務めておられたが、理事長に就任いただいてすぐに文章講座で市民約四十人を教え、『母』というテーマで書かせた作文を赤ペンで熱心に添削して下さった。これには、千田編集長や、秋葉さん、そして今は亡きくらたけんさんなども熱心に受講した。井上ひさしさんの図り知れない偉業を偲びご冥福をお祈りしたい。

能村 研三



# 蒼茫集



微 熱 淵上千津

筋力で脊椎支へ菜種梅雨  
春耕の天地返しをこころにも  
どこ痛むでもなき微熱沈丁花  
「枝渡し」てふ朱鷺の愛温かし  
忘るる筈なき傷なれど遠がすみ  
出直すや小流れとびて花菜原

方向舵 北川英子

白鳥去ぬ先達しかと方向舵  
みな揃ふとなぜにばば抜き春の雪  
しやぼん玉あなたも私もいづれ消ゆ  
身ほとりに湯の花匂ふ遠雪崩  
手術後の陽はまた昇り春一番  
誰か病めば家族一つに辛夷咲く

千 年 大畑善昭

うすらひや少年老いてなほ少年  
草焼いて世の喧騒の外にゐる  
かげろふや人の百年木の千年  
座禅草かすかな水に雲をおき  
豊屋が入りてよりの春日和  
梅咲いて小さき寺の主われ

持ち時間 辻直美

母といふ遠心力や野に遊ぶ  
囀や空におほきな穴開けて  
肩に手を置く春灯の写真かな  
朧濃し身ぬちの夫と語らへば  
涅槃図や吾も嘆きの一人にて  
種蒔くやわが持ち時間計りつつ

春の山 安居正浩

名山を裏側におき春の山  
雛の日を間近にしたる軒雫  
草餅や昨日と同じ話して  
額に風触れて遍路の第一歩  
隠しごと出来ぬほど酔ひ春の雪  
出陣のごとはくれんの気負ひたり

飲食の音 藤原照子

頂へ襷をしぼりて雪解富士  
補聴器に飲食の音冴返る  
外つ国と津波のつなぐ二月尽  
昭和八年生れまた逝く春の雪  
魚焦がし我に返りぬ夕おぼる  
ハングライダー翔つ山頂の雪解風

緒につきぬ 千田百里

まだ醒めぬ山にほほずり春の雲  
如月の退屈さうな竹箒

転轍機うごけば春の動くかなり  
若き姉もへチマコロンもおぼろかな  
卒業の袴乗り込む大江戸線  
大朝寝して晩節の緒につきぬ

白加賀 成宮紀代子

梅香る無傷の母の柩出す  
涙目で悔やむヘルパーのみてぬくし  
花祭壇たちまち解かれ冴返る  
青ぬたや母系にしるき京訛  
白梅の霞むばかりや母無くて  
白加賀てふ一本棒の梅買ひぬ

混 沌 荒井千佐代

つばくらのよろこぶ軒の深さかな  
本校と分校へだつ春の潮  
花棕櫚の傷み初めたる潮曇り  
混沌とけふも終れり春満月  
鳥雲に血縁ときにとましき  
蓬摘む耶蘇落しとふ断崖に

原 石 田 辺 博 充

春愁のわれを視てゐる埴輪かな  
逃避行土壇場なりし春の夢  
そのときの太宰のころ水草生ふ  
今生の奈落見しとて峰入りす  
初孫てふ原石を抱き春うらら  
沈丁に見蕩れすぎたる微熱かも

重 ね 波 吉 田 政 江

春動く地球の裏より重ね波  
鳥雲に富山の葉来る頃か  
しやぼん玉遠くへ飛ばしずる休み  
抱きはこぶ五疋の米や春一番  
末黒野を抜けきし靴のままロビー  
忌二つ修し弥生の過ぎにけり

竜 天 に 田 所 節 子

身の臙つうんと抜けて薄荷飴  
富士風すさび二月の漁師町  
三月十日うす紫の雲走り  
竜天に登り神木倒す風  
魚に湯をさつとかけたる夕おぼる

地酒もてなす臙夜の里言葉

厄 介 な 数 久 染 康 子

鳥雲に今日も見送る側にをり  
春愁や厄介な数二人とは  
綿あめの風の形に春まつり  
舟下り芽柳酔ひをしてゐたり  
蹠より薄ら氷零し鴨歩む  
陽炎に積荷崩るる先行車

子 の 齢 菅 谷 た け し

獺の祭のやうに増ゆるメモ  
税申告済ます安堵の花ミモザ  
子の無くて部屋の片付く沈丁花  
饒舌も寡黙もありて雑木の芽  
落雲雀火急の知らせ届きしか  
桃の花妻の言ひける子の齢

黙 っ て お と な に 辻 美 奈 子

産み足らぬからだよ杉の花粉症  
サイネリア黙つておとなになつてゆく  
雛菓子の緋色をすこしもてあます  
花びらのいちまい隔て死者生者

豊饒の土くれのあり雀の子  
天体に国境はなし春の暮

時あはく

武藤嘉子

春立ちぬ銀杏並木の背伸びして  
春雪の明るさにゐる余生かな  
たしかなるひと言ほろにがき花菜  
耕しの音も光も鋤き込めり  
ゆく雲の上に雲あり植木市  
時あはく流れて彼岸桜かな

春への出口

望月晴美

改札は春への出口タツチせり  
杉山のふんはり羽織る昨夜の雪  
手作りの土器のゆがみもあたたかし  
放たれし牛かげろふを噛んでゐる  
生き生きて古希とよ紅梅明りかな  
雛納むこれより雛に白世界

監視カメラ

秋葉雅治

銀盤に憑かれてうかと二月尽

ともに戦火のがれし身なり雛飾る  
地虫出づ監視カメラの埒外に  
竜天に登るや梯子置き去りに  
その日から肉食系に合格子  
なに不足なくて春愁もてあます

少年期

千田

敬

春あられ仏足石に弾みをり  
格子戸の内に灯ともり涅槃雪  
陽が射して春降る雪を囃しけり  
百年の梁に俄の吊し雛  
砂底の足がものいふ浅利掘り  
青き踏む足裏はいまも少年期

輪翔

松井志津子

新墾の草に影生る涅槃の日  
薔薇の瘤雨のうるほす二月尽  
白鳥引く輪翔のいま天心へ  
寄贈とふ駅の座蒲団あたたかし  
梅林の土ふかぶかと膝癒ゆる  
臃濃きかな連れ合ひといふ寝顔

# 潮鳴集



三月十日

堀口希望

すでにして鶯餅は一箇の詩  
竹とんぼ飛ばし三月十日なる  
春泥も遊びの舞台良寛忌  
畑土の呼吸聞きをり復活祭  
口おほきく開けて磐梯山笑ふ

紙の味

林昭太郎

啓蟄の地下三階の電話鳴る  
花冷や紙のコップに紙の味  
あたたかや網点粗き顔写真  
プルタブを引けば泡の音風光る  
三月や着付け教室紐あふれ

三月の水

古屋元

江東や三月の水ぐいと飲む  
太陽へ発止とシュート合格子  
岩波ホール出で外套にこもりたる  
東京の空なる深度鳥帰る  
手術室へ余寒の扉また扉

春の宵

篠藤千佳子

春宵のピアノつやつやしてゐたる  
やはらかき雲を浮べて針供養  
ライターのぼぼと火の点く余寒かな  
きさらぎの風となりたる大ジャンプ  
マスクしてこの世にピント合はせけり



# 沖作品



# 能村研三選

哺乳瓶の穴を抜げて春立てり  
指先がふくらんでゐる大朝寝  
春雪の居心地のよき土竜塚  
吊橋に乗れるは四人囃れり  
畳屋の新の半纏針供養  
雛出しやしばし時差ぼけ修されよ  
水底をさすらふごとく梅の下  
織られゆく縹いろなる春シヨール  
抜け駆けも落伍もなくて犬ふぐり  
合流の川それぞれ春のいろ  
春の雪ふはりとなにもかも白紙  
がうがうと黛火攻めあひ春寒し  
青空に風ひびきあひ辛夷の芽  
草も木も山の笑ひに従へり

市川市

和田 満水

埼玉

大石 誠

市川市

荒原 節子

大海に出よと押しやる流し雛  
潮音を調べに和布刈神事かな  
卒業の校歌の中にある故郷  
春の雪静かな場所に積りけり  
畦道の土の弾力水温む  
アダージヨで渡る雲あり山笑ふ  
土鈴雛紙のひひなの出窓かな  
坪庭に京の空あり雀の子  
春光や紙飛行機の何処からか  
リラの花触れ行くたびに匂ひ立ち  
針供養つんつん光る木々の先  
一車両同じ広告山笑ふ  
料峭や干潟に鳥の点々と  
寒襖気合もろとも水浴びて

神奈川県

福島 茂

千葉

清部 祥子

深川 峰子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

哺乳瓶の穴を拡げて春立てり

和田 満水

生まれたばかりの赤ちゃんにとって毎日欠かすことのできないのが、授乳。母乳の出る人は母親と赤ちゃんの肌の触れ合った呼吸で、その飲み方も自然と出来上がっていくものだが、哺乳瓶によるミルクの授乳となると、父親までがこの作業に加って大変である。生育していくに従って当然ミルクの量も多くなることから、哺乳瓶の乳首の大きさも調節しなくてはならない。赤ちゃんが目日に成長していく姿をかたわらで見ながら春の到来と共に、哺乳瓶の乳首の穴の大きさを拡げることを楽しんだ。

雛出しやしばし時差ぼけ修されよ

大石 誠

飾られたお雛様をおとなしく鑑賞するのも楽しいことであるが、一年ぶりに箱から出してお雛様を並べる作業はもっと楽しいことである。雛人形の姿を思い描きながら、ひとつひとつをし

ていねいに並べていくのであるが、雅な世界をコンパクトにした王朝の生活様式をしばし堪能できる。そして箱から出す時は何かときめきすら感じるもので、包まれた薄紙をはがしていくと、まだ覚めきつていないような美しいお雛様の姿を見ることができた。これを作者は、時差ぼけとして捉えたのがいかにも現代的である。

春の雪ふはりとなにもかも白紙

荒原 節子

今年には異常気象とでも言うのか、四月に入って桜が散り始めたころに東京でも雪がつもったりもしたが、春の雪は降っても何かはかないものである。牡丹雪とも言われ、水分の多い雪で大きな積雪にはつながらない。うっすらと地上を覆ったかと思うと、瞬く間に消えてしまうわけだが、それを作者は「なにもかも白紙」と人間の生活の上での言葉を使って面白く捉えた。

卒業の校歌の中にある故郷

福島 茂

ここで、唄っている校歌は、地元の学校ではなく、東京など都会に暮らすもの同士の同級会での場面であろうか。校歌は卒業してからも、いつまでも口ずさめるもので、校歌の中に詠まれている山や川の名はいつまでも懐かしく、それを口ずさむことで、頭の中には山河の風景が蘇ってくるものである。

アダージョで渡る雲あり山笑ふ

清部 祥子

アダージョは、音楽用語の一つ。原義は「くつろぐ」であるが、音楽用語としては遅い速度を示す。また、遅い速度で書かれた楽章や楽曲そのものをアダージョと呼ぶ。アダージョで渡る雲と言うのは、まさにゆつくりと穏やかな雲の動きを述べているのだらう。山々は春になって木々が芽吹き、山は次第に春の様相を呈してくるのである。(以下略)